

コメンテーターの条件とは

久しぶりに表題の松尾貴史のちょっと違和感(毎日新聞 3月12日)を途中から紹介。話はいま話題の総務省「公文書」、放送法「政治的公平」疑惑から始まる。そこは別にレポートするとして、わが年寄りにも関わる酷い問題についてである。

丸と四角のレンズという個性的な眼鏡をかけてキャラクター作りにいそしんでいる大学教員が、テレビの情報番組のコメンテーターとして「活躍」している。彼はインターネットのトークショーで「どうしたら高齢化とさまざまな人生のリスクを軽減できるだろうか」ということを考えて、たどり着いた結論は集団自決みたいなことをするのがいいんじゃないか。特に集団切腹みたいなものをするのがいいんじゃないか、ということです」

「ある年齢で自ら命を断ち、自らが高齢化し老害化することを事前に予防するというのは、いい筋なのではないかと」などと発言した。「いい筋」だという自画自賛が不気味ですらあるが、正気でこんなことを大勢の人が見聞きする場所で言えるとは驚くべきことではないか。これらの発言を聞いて、人口爆発によって食糧難が起きる近未来を描いたSF映画「ソイレント・グリーン」を思い出した。ある年齢で、老人たちは工場で緑色の食品にされてしまうというおぞましい物語だった。

高齢化に関する差別発言は、多くの方面から反発を呼び、海外のメディアも批判的に論評しているが、日本のテレビ局はほとんど問題視していないようだ。なぜこのような人物を起用するのかについて、テレビ局のプロデューサーが「個人攻撃や政権批判をしないといった一定のラインを守ってくれば」という条件のようなものを説明した記事があった。「政権批判をしない」という条件があるのは驚愕ではないか。報道機関としての職務を放棄している。現状追認や政権擁護のコメンテーターだけを番組で並べて、視聴者に考えるきっかけすら与えない。この10年ほどでテレビの報道は、これほどまで劣化が進んでしまっているのか。

集団切腹といった発言の主は「議論のための隠喩だった」と弁解しているが、彼の長年の持論であって確信した上での発言ということは確かではないか。人の尊厳を「生産性」だけで語る人物は現職の国会議員にもいるが、集団切腹といった発言には怒りよりも発言の主の品性を哀れむばかりだ。

議論のための抽象的な譬喩さだとしても「高齢化とさまざまな人生のリスクを軽減させる」と言っているのだから、ある意味で具体的な暴言だ。医療費や社会保障費を削りたいのだろうと思わざるを得ない岸田政権のちょうちん持ちとしての誘導なのだろうか。そうであれば、その物言いも放送法解釈変更後のテレビで重用される理由としてうなずける。彼もまた、政権が生み出してしまった存在なのだろうか。

(2023年3月16日)